

毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 7 卷 第 1 1 号

1962年12月25日



沼池尻付近より白馬岳(主稜)

撮影 高橋秀男

大町山岳博物館

南アルプス

ライチョウ訪問記

平 林 国 男

南アルプスにライチョウが生息していることは古くから知られていた。しかし、これが学問的に調べられるようになったのは、大正年間からである。小泉秀雄、矢沢米三郎、河野令藏氏など信州の博物学の諸先輩によって先鞭がつけられ、ライチョウの分布などが次第に明らかにされている。

今回、筆者は日本自然保護協会の南アルプス南部学術調査隊の隊員として8月21日から27日の7日間、南アルプス南部地域のライチョウを訪ねて歩いた。

信州の諸先輩が調べた時代から40年以上の年数が数えられるから、諸先輩が南アルプスの峰でめぐり合ったライチョウのひまごのそのまたひまごに相当するライチョウを訪問したことになる。

ところで、今回訪ね歩いた範囲は赤石山系の南部、すなわち塩見岳から大沢岳の間である。調査日程の関係から南アルプス山城のごく一部分だけに限られている。とにかく南アは規模が大きく北アに較べて歩くのが大変である。また、山小屋の数が少なく、北アの山小屋に見られるような町のホテルより立派な小屋の姿は見られない素朴な小屋がダケカンバ林や針葉樹林の中にひっそりとしたただすまいを見せている。

北アの山小屋には食糧や寝具がそろっていて便利である。夏の北アの登山ではお札の束を持って行けばすべてが間に合うしくみとなっている。南アでは寝具、食糧すべてを背負って山小屋は風雨をしのぐ場所として、一夜の宿りを求める場所である。山小屋のないコースを歩くとなると必ずテントをもってカタツムリ生活をしなければならぬ。

北アでも登山の初期は南アのような素朴な姿の山小屋が多かったと聞いている。時代の移りかわりは恐ろしいもので、昨今の登山ブームの勢いでは、南アにもホテルのような山小屋が出現するものさう遠い日のことではないだろう。

翼や強力な足を持って移動する動物の生活を調べるのは非常にむづかしいことである。彼等は好みによって棲む場所を移動し、登山路をあたりまえに歩いては姿さえ見かけない場合が普通である。

比較的のんびりしていると云われるライチョウでさえ登山路で姿を見かけるのは珍しいことである。

我々が北アルプスの爺ガ岳でライチョウの生活を調べた結果わかったことであるが、彼等は同じ一つの山でも季節によって棲む場所をかえている。また、1日のうちでも時間によって出現する場所が違い、行動の一般的な

原則がつかまれるまでは神出鬼没のものであった。

夏山で登山路近くにさまよっているライチョウを見かけることがある。その場所はたまたま夏の生活に適した場所であるか、あるいは1日の行動のうちでちょっと寄道したものが偶然の機会に時間的に一致して発見されたという訳である。

登山路を足速やに通過するといった忙がしい日程で彼等の存在を確かめることは非常に困難である。しかし、ありがたいことに彼等が生活している場所には必ず彼等の生活の痕跡が残されている。また季節によって生活の場所や生活様式をかえていることも存在の有無を見当つけるには都合のよいことである。

広大な山体を持つ南アのような山を端から端まで調べ歩いていたら、一生かかっても調べつくすことができないであろう。

調査をする時期の季節によって生活場所に目安をつけそこいら一带を探すと必ず生活しているライチョウが発見できる。もし、発見できなくともそのあたりには生活の痕跡が残されている。

痕跡を調べる上で最も役に立つのは糞である、抜けかかった羽毛や足跡、また植物などをつついた食痕も重要な手がかりになる。

ライチョウが勝手気ままに生活した跡を、人間社会の犯罪捜査よろしく、これらの手がかりを中心に彼等の歩道を読み、推理小説もできに彼等の生活をうきほりにする。

ライチョウと一語の地域で生活し、彼等を捕食しているキツネ、ヤマイタチ、イヌワシ、クマタカなどの糞も間接的な手がかりとして重要なものとなる。

第1図はライチョウの生息が確認できた場所を示している。

■印は生体を観察した場所を示す。

●印は5月上旬から6月下旬頃までライチョウの雌雄がなわばりをつくって生活していた時期に脱糞された糞を見た地点である。

この糞の分布地では近くのハイマツ群落中に必ず巣がある。ライチョウの雌が熱心に巣作りし、卵を生んで自分で卵を温めるなど彼女の母性活動を展開した場所である。

ところでこの糞は雄が脱糞したものである。彼はこの地点でじとなわばりや雌の行動を見まもりながら、他のライチョウが侵入してくると勇敢に飛んで行ってなわばり防衛の闘争をくりひろげた。

であるから、この糞が発見される場所はいずれも見晴らしの良い尾根筋の幾分小高くなった場所である。また糞の形態はこの時期特有の少し変曲した長方形で、やや硬い長さ約2.5cm巾5mmくらいのものである。とはいっても風雨にさらされる状態であると流れ去って見つからないが、岩蔭などであると保存されてライチョウの生活を教えてくれる。

◎印はつがい期の早期すなわち産卵前に雄と雌がつかいでなわばり内を行動している時一夜の宿りをこの地点に求めたねぐらの跡である。

糞の形態は●印のものと同様であるが、1個所に約30粒程度の多量のものが山積されている。さらにこの糞の

数mの範囲内に必ずもう一つの山積みされた糞が発見されている。この二つは斜面の等高線に沿ってほぼ一直線に行儀よく並ぶことが普通である。

なお、この時期のねや糞は雪上の場合が多いため、雪が消えると自然に流されて、夏まで保存されることは少ない。図中の糞はたまたま岩蔭であったため保存されたものである。

○印は卵が孵化して雌親が雛を育てる時期の糞である夏山で登山者が見かけるのはこの期のライチョウであるこの時期には食物の関係からニワトリの糞によく似たやわらかい糞であり、乳白色の部分が多い。この糞は保存されにくく一晩の雨で洗い流されるのが普通であるから、時間的には極めて新しい糞といえる。この糞が発見されたら必ずその近くでライチョウの生

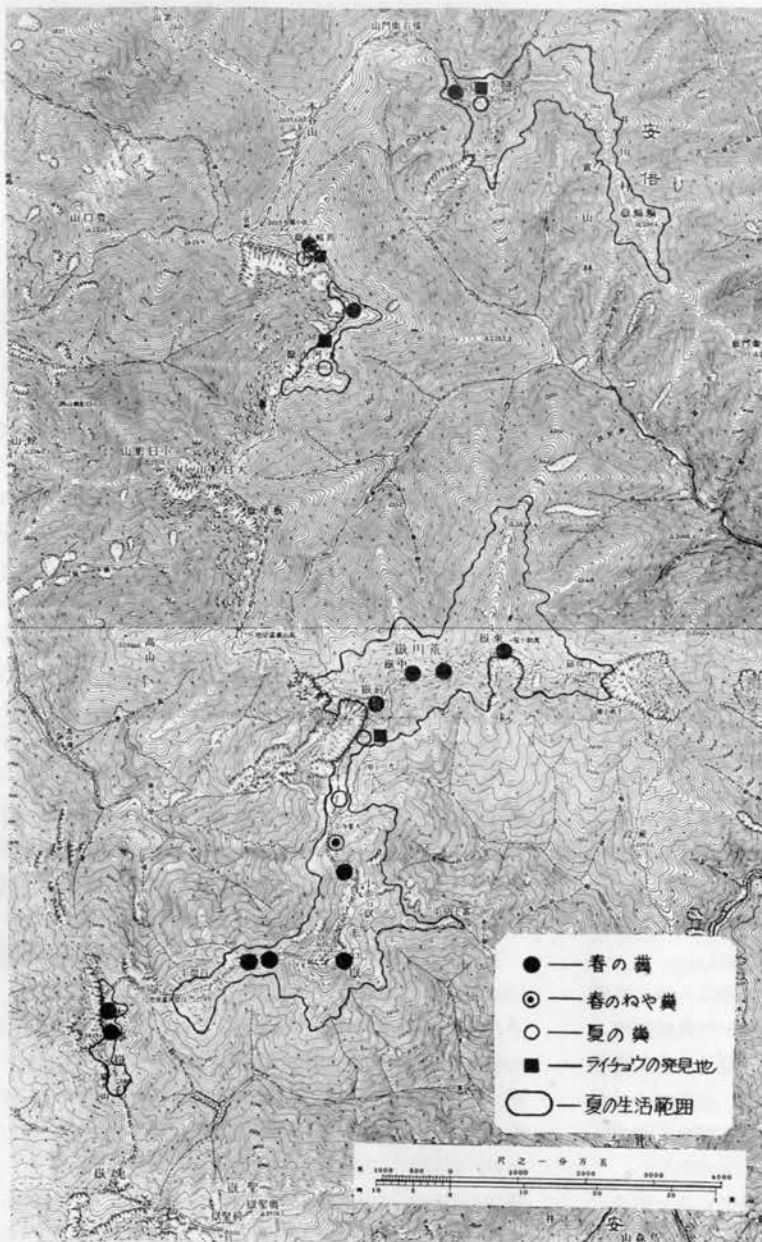
体が生活しているとみてよい。

ライチョウは純粋の高山鳥であり、夏でも冬でも高山帯にとどまって生活している。高山帯は高木限界以上の高さにつけられた名称であるが、南アルプスでは平均して2,650mの高度がこの限界になっている。しかし、この限界附近ではダケカンバ林の発達がよく、場所によっては2,700m以上にならないとダケカンバがなくならない場所も見られる。

森林状に密生したダケカンバが次第に粗森になって形が小さくなり、それらが消失する高度以上がライチョウの生活場所である。

といってもこれは夏の間の生活範囲であり、冬になるとこれらのダケカンバ林まで下ってくることが考えられる。図中で囲んである範囲は夏の生活範囲であり、ライチョウは非常に限られた区域で生活していることになる。また、一つの山から他の山へ移動するといったことはほとんど稀である。彼等は一生涯、いやそれどころか代々その山に棲みついている。そして各山の小範囲で生活を営んでいるのである。

若しライチョウが人の言葉話せるなら、彼等にその山のすべてのことがらを聞いてみたくなるといふものである。(山博学芸員)



晩秋の仙丈岳に

高山植物を尋ねて

寺島虎男

昭和37年9月29日(土) 午後本校の同僚2名と卒業生1名を加えて4名のパーティーで車中の人となり、伊那北から国鉄のバスは高遠ダム、続く美和ダムの景勝地のわきを通り、一路長谷村、戸台の終点にと急ぐ。晴天続きで黒川や戸台川の水も細まり、多くは河原の中の道をケルンを頼りに約2時間半歩いて、夕やみ迫る頃ガスの中にほのかに電燈の漏れる丹溪山荘に到着。経営者は長谷村戸台の上島四郎氏で54~5才、俗人離れた雲上人と云う感じ、言動優雅、気品あり。不図亡くなられた大町の百瀬慎太郎氏にめぐりあったような思いだった。

山荘は最初戸台川の河原に建てられてあったものが洪水で流されたので、最近において岩盤上の安全地帯に再建、用材も新しく堅固な造り、しかも清浄であること恐らく山荘中に比なし。上島氏の懇切なる優遇を受けて第一夜の夢を結ぶ。*参考 素泊り200円寝具付は250円△途中の植物として花のみられたもの極く僅か。岩壁にシナノナデシコが紅紫色に、ミヤマアキノキリンソウ、が黄花、ノコンギクは青紫色、ゴマナは白色と目にとまった位のもの。巨大型のフジアザミは既に冠毛となって諸所に生えていた。又一段丘上の葉だけのクズの大群落は見事なものであった。道の左右に鷹岩、白岩、幕岩が屏立して景勝をそえ、岩隙にはイチョウシダ、ウチウラン、クモノスミダ、イワインテン、トダイハタザオ、シラゲシヤジン、ムシトリスミレ、ウチワダイモンジソウ等が石灰岩地を基盤として珍稀品として遺存しているが時間なきため立寄りずらに去ってしまった。山荘近くなってから道のまん中の古切株に墨々と重なりあって径40cmに及ぶキノコの大群落を発見、懐中電燈を照らしてこれがモタセと称する食菌だと分り、早速キノコ汁にとリックにおさめた。

9月30日(日) 天候すばらしく碧空、雲一つなし山荘附近にはシラビソ、オオシラビソの大樹多く、直径約40cm余り、高さ40m以上に達するものあり驚く。甲斐駒ヶ岳(東駒)が正面にグッと近く見られた。

AM7時半出発、藪沢を渡り、森林の中に入り、尾根にとりつく。これより尾勝旧道出合までが丹溪新道で、上島氏の御努力により開拓されたものと聞く。約1時間で鋸岳の見える展望台に着く筈だったが、途中コメツガの大純林がうつ蒼と茂り、下の沢まですき間なく繁茂している状態は北海道の山を思わせるに充分であった。ツガの大木の根もとにツガマツダケが出ていると聞き、皆で熱心に捜したりしていた為大部時間を費してしまっ

た。併し1本も見当らずそれに代るショウゲンジ(コムソウタケ)アブラシメジヤホウキタケ等が藪中に出て出して夥しく多産、いずれも食菌で汁の実にと沢山採った。

展望台附近の林中でカケス(カラス科)が数羽姿を現わす。コメツガの針葉樹帯が約1.5軒も続く中を通りぬけて馬ノ背の緩線に出た。約1時間で尾勝谷からたどり着く尾根道に出合う。この辺から視界が開けて東駒は勿論、西方に中央アルプスの西駒、空木の主峰、その後の雲上に北アルプスの御岳、乗鞍、槍、穂高と主峰がのそいで実に壮観だった。2720m辺よりすばらしく広大なお花畑となるが、多くの高山植物は凋落の状態。トウヤクリンドウが至る所に多く見られたが、既に花色あわせて見る影もなし。ウラジロナナカマド、タカネナナカマドウスノキ類等は紅葉して美観、2600m辺が高山帯下部でハイマツ帯に移行。2740mで馬ノ背ヒュッテの藪沢小屋への分岐点。ここから中腹を横切って大滝の頭への捷徑が通じている。この附近のお花畑にはミヤマコウボウ、ミヤマクロボスゲ、コメススキ、ミヤマドジョウツナギ等イネ科の大群落があったが葉もうらがれて淋しい姿。西方岩涯には稀品シコタンソウ(ユキノシタ科)が種子を結んで散在していた。仙丈岳は南アルプス中でもお花畑の規模の大きく、その要素である高山植物の種数も多いことにおいて屈指とされる。

クロユリの群落、タカネグンナイフウロ、シロウマオウギ、タカネヒゴタイ、特に珍らしいものにヒメアカバナ、タカネズメノヒエ、リシリシノブ、センジョウスゲ(特産)センジョウデンダ(特産)等がある。ハクサンフウロとグンナイフウロの紅葉は格別目にとまった。2棟の仙丈小屋は頂上直下にあり、営業期間が7月1日から9月20日までとは閉鎖が早すぎると思った。番人が不在、たまたま某大学山岳部の7~8名のパーティーが飯ごう炊さんをしている最中だった。

ここから急な上りとなりザクザク小石交りの砂道を約50m程登りつめて漸く3,032.7mの頂上に立ったのが、P.M.2.00(予定時は12.00頃)。頂上には東芝山岳部の建てたと云う遭難防止の方向指示盤が取り付けられてあり周りにはいくつかの石碑もあった。本岳の基盤が赤石層群の一連をなす砂岩、粘板岩の南に貫通する水成岩帯であり、東駒ヶ岳方面の領家花崗岩帯であるものと異り、制約を受けて高山植物も多少異なる分布をみせるではなかろうかと興味をもつ。頂上からの大観はすばらしく、東

西に北岳(3,192.4五)続いて間ノ岳(3,189 m)西農鳥岳(3,056 m)が聳え、これを白峰三山と称する。特に北岳は富士山に次ぐ第2位の山で、他山を威圧している山肌は黒紫色に異彩を放っていた。富士山は北岳の西に近く雄峯を現わして大きく見えた。南アルプスには3000 m級の高山が13座もあり、北アルプスの比ではない。北方には近く東駒ヶ岳(2,965 m)がピラミッド型の山頂鋭く尖って粗粒花崗岩(鳳凰花崗岩)を基盤として成り立ち、仙丈の女性的なのに比べて如何にも男性的な感あり。仙丈岳にはカール地形が2ヶ所、仙丈沢と面したところ小仙丈岳(2,850 m)の東北面に、底部にはモレーン(推石)がみられる。高山植物は中性、湿性の種が多い△仙丈を辞して小仙丈を通過、鉢伏状の山の稜線を相当下り、大滝の頭(2,450 m)の尾根に取りつく。小仙丈岳は下まで矮小のハイマツ一面に敷つめた間隙を縫うてウラジマツツジ、クロマメノキ、オウバスのノキ、ナガバノスノキ、ヒメイワカガミ等は鮮紅色に、矮小型のカラマツ等は鮮紅色に染まり、その色彩の美は言語に絶す。馬ノ背から仙丈にかけてコケモモの豊産なのにも驚いた。△大滝より北沢峠(2,032 m)まではシラビソ、オオシラビソ、コメツガ等の密林の中を急降下、途中で陽はトッピー暮れて一条道を頼りに懐中電燈を照らしながら北沢峠着がP.M. 7時頃。山梨県側にある北沢小屋までは峠の中腹をたどること約30分で到着。ここに第二夜を過ぎた。この山小屋は故竹沢長衛氏の建てたもので、既に30年余りを経過、二階建の大きなものである。清冽な水が仙水峠下から引かれ水便よし。竹沢長衛氏は北沢方面登山ルートの開拓者として知られた人である。ここから東駒ヶ岳、鋸岳への往復登山は容易である。東京から登山者が男女十余名あり、皆山梨県側より登った者ばかりである。夜半1°C以下に下り、相当の寒度を覚えた。

*参考 素泊り250円、寝具付は300円(食事抜き)

10月1日(月) 引続き晴天。A.M. 7時30分出発再び北沢峠に出る。リスが倒木の上を走ってゆく。路上の岩には故竹沢長衛氏のレリーフがはまこまれてあった峠から東側を下る道は藪沢にそっているシラビソの原始林の屋なお暗い程ですばらしい。

△シラビソとオオシラビソの2種は共にAbiesで大変似ている。その区別点に今迄判然せぬものがあったが今回の登山で充分比較観察のチャンスが得られたことを幸と

種別	項目	樹皮	茎に対する指紋	葉	葉上の毛	葉	幹	毬果
シラビソ Abies Veitc- hii Lindl.	黒味が弱 樹脂の臭あり	固い	太い	細長くみな 真直に同じ 方に向つて いる疎生	褐色の毛が 濃くて多	葉の先の方 が元より僅 かに大きく 向つて反つ ている上側 に並んだ樹 皮は一そ う明瞭密	紫がか つた方 の白樹皮 をぬら すとい 層明か	小長 さ6 内外 直径約 3
オオシラビソ Abies Mari- esii Mast- ers	黒味が強 い臭あり	ふつくら しめ軟	細い	葉の先の方 が元より僅 かに大きく 向つて反つ ている上側 に並んだ樹 皮は一そ う明瞭密	褐色の毛が 濃くて多	葉の先の方 が元より僅 かに大きく 向つて反つ ている上側 に並んだ樹 皮は一そ う明瞭密	紫がか つた方 の白樹皮 をぬら すとい 層明か	大長 さ8 内外 直径4 位

し、ここに比較表を示す。両者其木の膚がなめらかで且白っぽい上に葉の形、茎の具合も区別しにくい樹種だが、表中の項目により、特異点を識って相対すれば大体分る事と思う。

△シラビソはシラベとも称し、オオシラビソの方を一名アオモリトドマツと呼ぶが之は北海道に産するアオトドと混同し易いのでオオシラビソといった方が無難であるとのこと。分布は本州特産でその北限界が青森県の八甲田山、それから南へ中部の諸高山を経て静岡県南アルプス連峰を南の限界とするとのこと。

針葉樹の原始林の中を下る。マイヅルソウ、ゴゼンタチバナ、ツルツゲ、コケモモ等褐色や紅色に彩る果実が道の両側に目立つ。1,560 m辺までそれ等は降下している。八丁坂の急坂を経て約1.5時間で丹溪山荘に到着。小憩の後再び戸台川原を戸台部落まで歩いて、P.M. 12時45分のバスで帰途についた。

○今回の登山は相当の荷物を終始背負っての仙丈岳を中心に尾根縦走をしたわけだが、行会う登山者は大方水筒写真機等携行する位で軽装であった。恐らく信州側では丹溪山荘を基地とし、甲州側では北沢小屋を根拠地としての日帰り登山であった。仙丈又は東駒ヶ岳への単一登山を試みるとすれば、天候にさえ恵まれればこの方が軽快便利な点で一般者にはおすすすめしたい。尚冬山のスキーであるが、南アルプスに余り知られないスキー場の開発も今後率先して仙丈岳方面に計画を進めたいと上山四郎氏が語っていた。

(豊科高校講師)

寒 風

国庫補助金最低記録 昭和37年度の山岳博物館への設備費国庫補助金は34,000円也で、昭和27年度よりの過去11年間における最低記録です。この原因は主として文部省の査定方針が変ったためです。ことしの設備費(維持)補助金の総額は1,608,000円、これが全国でわずか28館を対象として交付されております。一館平均交付額は57,000円、わずか2万円という館が14館あり、大町山岳博物館は全国第6位の高額所得者(?)となっています。人創り・国造りのために補助金総額の十倍増を文部大臣閣下はじめ関係国会議員の皆様切にお願いいたしたい。(おこじょ)

観覧料収入は最高記録 本年度の山岳博物館の観覧料収入はすでに192,815円(11月末現在)となり、創設以来の最高記録を破りました。3月末までには21万円にはなる見込みで、昨年14万1千円とくらべると成長率50%であり、見通しは明るい。しかし、年間21~22万円の観覧料では年間維持費の1割にも満たません。博物館というものが最初から営利を目的としたものではないことは確かですが、利用者の増大と財政的基盤の確立には一層努力していかなければならないと考えています(かもしか)

暖 流

南アルプス植物雑感

中村 武 久

(3)

南アのフロラは北アより豊富?

長年北アルプスの植物になじんだ人の目には、南アの高山植物といっても北アのそれ程に印象を深くするものはまずないであろう。これは種類の問題ではなく



タカネマンテマ

そこの植物が作り出している植物景観、俗に御花畑、むすかしくいえば植物群落ということになるが、その群落が比較的貧弱であるからだといってよいだろう。といって南アルプスに御花畑がまったくないわけではなく、以前にも書いたように、南アルプスの高山帯はその多くがハイマツでおおわれ、いわば南アの高山帯の植物群落はすでに老年期に達したかの感があるものであり、そのハイマツの間に僅かに小さな御花畑が残されているという程度で、つまるところ大規模な御花畑がみられないことから、北アのそれ程に印象が深くならないであろう。

しかしその植物景観、即ち群落の規模はともかくとして、種類について北アのそれと比較してみたらいったいどうなることになるだろうか。もちろん南ア、北ア、両山系における高山植物フロラは正確に知られていないので、その数を上げてとやかく論議する段階にはないが、私が実際にその両山岳地を歩いてみて、また今までに知られている種類について、一方の山系即ち北アにはあるが南アでは知られていないもの、またその逆になっているものなどの特産種や稀品に属する種類について眺めてみると、果してどちらに軍配が上げられるかはなほだむすかしい。

これに関して二、三の例をあげてみよう、まずキク科の植物でヨモギの類についてみると、ヒトツバヨモギ、ミヤマオトコヨモギ、タカネヨモギ、ヤマヨモギは両山系にあって問題外だが、この他ではハハコヨモギ、キタダケヨモギ、チシマヨモギが南アルプスで教えられ北アルプスでは特有なものが数えられない。リンドウではど

うかという、北アのみのもとしてシロウマリンドウ、ミヤマリンドウがあげられるが、これに対して南アではサンブクリンドウ、アカイシリンドウ、ヒナリンドウを数える。またバラ科では、北アのカライトソウやベニバナイチゴは南アではみられないが、そのかわり南アではキンロバイ、ハクロバイを数えられる。こうして一つ一つの科または属について詳細に検討してみれば、そのフロラの大要が納得ゆくだろうが、といってこれも決して容易にいい切れない問題が出てくるのである、例えばコマクサだが古い記録には南アルプスでもみられたことになっているが、実のところこの4年間南アルプスを歩いて一度もコマクサにお目に触れたことがないのである。ともかく一面にはこうした問題はあろうが、北アのツクモグサ、ウルップソウといえ、南アではキタダケソウ、タカネマンテマ、タカネピランジなどという如く、それぞれに特徴があり甲乙つけがたいものがあるが、そのフロラ構成についてはやや南アにその軍配が上がるのではなかるうか。

しかし先きにも述べた通り、南アの高山植物はまばらであり、いわゆる豊かな御花畑が少ないので、その種類は例え北アのよれより多くてもそう容易に目に触れるものではない、いうなれば御花畑の北アルプス、稀少価値植物の南アルプスとでもいおうか。

(山岳博物館学芸員・東京農大一高教諭)

(註) フロラ——植物相ということで、その地域における植物の種類をいう。

長野県 安曇地方の民話 (その二)

針ノ木峠の七ツの瓶 青木 治

本能寺の変で織田信長が明智光秀のために非業の死を遂げた時に豊臣秀吉は中国征伐からいち早く帰り山崎の合戦で見事主君の仇をなしとげました。そこで信長の一族や宿将達が集まり清洲城で清洲会議を開いて善後策を講じました。この会議には早くも秀吉が全国統一に向う芽生が見えておりました。信長の長男で本能寺の変の時京都の二条城で自殺した信忠の遺児三法師をおもちゃで手なづけ、三法師をだいて会議に出席し宿将達に頭をさげさせたあたり。あるいは大阪城を築くなど中々の巧者ぶりでした。その後柴田勝家を賤ヶ岳の戦で負かして自殺させ、勝家に組した信長の三男信孝を尾張に攻め幽閉し、後に切腹させるなど中々の策士でした。

最後に残った二男の織田信雄も秀吉の術中におちて、ついに徳川家康と連合して兵を挙げました。その結果が小牧長久手の戦で豊臣方の池田信輝と徳川・織田の戦でした。この時四国の長曾我部元親や越中の佐々成政は信長の旧恩を感じて、家康方に組しました。佐々成政はこの時三河の徳川家康と連合するため天正12年の12月大勢の人馬を従え越中を出発し雪のアルプス越を決行したのです。彼の隊列は針の木峠を越え大町へと進もうとしました。この道行きは大変な困難でした。雪は多いし雪崩もあるしの上極寒でした。道もないこの山路ですから一層大変でした。凍傷も相次ぎ斃る人馬も多くありました

ところが彼は越中を出る時ありったけの軍資金を馬の背にして来ましたが、前途の困難を感じ針の木峠の岩場の一角に持参の七ツの瓶に黄金の軍資金を分ち地下に埋めたといわれます。かくして大町に出て更に信濃から三河に入りろうとしたが、その頃には秀吉・家康の和睦が成立しましたので空しく越中に帰りましたが、翌天正13年8月には秀吉のために攻滅されました。黄金の瓶についてはその後秘密の間にその時の関係者やその子孫が場所確認のために屢々登山していたといえます。かくて明治の初年になりました。この頃には関係者の子孫も一人へり二人へりして、たった一人になっていたということです。その最後の一人が同じ職場に働いていた同僚を一人つれて明治初年の或る日針の木峠のその場所に行きました。彼は祖先からの秘密を守るため同行の同僚を現場から一寸離れたところにおき一人で行って場所を確認し、更に1枚の黄金を持参して帰り友人に見せたといいます。その後最後の1人の人は北海道の釧山に勤めるようになったが、その釧山の落盤で不慮の死を遂げたといわれます。そこで同僚の友人がそれでも思い前の記憶をたどって現場附近だと思ふところを探して見たが、どうしてもわからないし、地形も前の場所ではないことに気がつきました。その後も数回に渡って探したがついに見つけることが出来なかったということです。(大町高教諭)

ヒヨドリ

長沢 修 介

紅葉がほつほつ始ろうという頃、短い秋は間もなく終り冬がすぐにやって来る事をそっと私に教えてくれるのがヒヨドリである。

夏の間はひっそりと山間で営巣してその声さえあまり聞えなかったのに紅葉と共に澄みきった青空を10羽20羽と群がってピョー、ピョーと鳴きながら飛ぶ姿は本当の秋を身近に感じさせる一つの風物誌でもある。その群も紅葉と共に数を増し一日何回となく50羽以上の群が上空を往復するようになりやがて渡るべきものは南に去ってしまう頃には野原はすっかり枯れて木枯が吹く。その頃になるとこの地に残った少群が村落に現れ取り残された柿や小柿の実をついばみに家々の庭先まで飛来する。そうなるともう白い冬がやって来る。姿は灰色であり映えないがこの鳥は元来アフリカや東洋の熱帯に多く分布する熱帯鳥であるが日本列島に限ってヒヨドリ唯一種が北海道まで北に棲んでいることは学術上非常にめずらしい鳥である。

冬のヒヨドリは特に小心でちよっとのことでもすぐに大



声を出して騒ぐ。止つている木の下を人はおろか犬や猫が通ってもすぐに大声をあげピョーピョーピョーと警戒声を発して仲間知らせる習性がある。樹上生活が主で木の実などを主食としているがまれに畑などを荒すため四国や九州などこの鳥の越冬地ではあまり好まれていない。又熱帯鳥らしく蜜が好きでツバキやサザンカの花の蜜を探すためばらばらに散らしてしまい顔を花粉で黄色にしてツバキの林を飛びあわしているという。

博物館だより

11月1日 本館裏に休憩舎工事を除き完成した放養場に1日だけ放し、状態観察
フェシングポスト使用。933平方メートル(写真右)
11月4日 労政主催の小熊山ハイキングに自然関係の指導者派遣(平林国男)
11月6日 大町市文化祭の一環として行なわれた木曾街道六十九次浮世絵展は好評のうちに幕を閉じた。なお10月28日と11月6日の2日間行なわれた浮世絵鑑定会には数十人が浮世絵を持ち込んだ。
11月21日 昨年行なったライチョウ調査も調査費不足のため10月で打切ったが、冬期調査をするべく、ライチョウ調査、カモシカ増殖等について県費助成方陳情
11月22日 カモシカ休憩舎工事入札
11月24日 海ノ口水鳥園の標柱完成
11月30日 量市消防団による放水試験、並に本館消火栓による放水防火訓練(本館庭)
12月1日 遭難救助隊員として参加し二重遭難した白河敏男氏の遺品、ヘルメット、ピッケル、オーパズポンを家族より寄贈される。

資料寄贈

OMCレポート No.143 奥多摩山岳会、わらじ No.49 わらじの仲間、四つばし No.62-9 大阪市立電気科学館、Nature Study No.7,10 大阪市立自



然科学博物館、長野県山岳連盟報 No.3 長野県山岳連盟、岳友 No.59, 66 岳友クラブ、OMCレポート No.144, 145 奥多摩山岳会、登攀 No.263 東京緑山岳会、会報 No.31, 10-11 明峰山岳会、京都山岳 No.61, 11, 12 京都山岳会、山毛樗 No.65, 66 広島山の会、愛大山岳 No.6 愛媛大学山岳部、おいらく山岳会月報 No.21, 22, 23, 24 おいらく山岳会、わらじ No.50, 51 わらじの仲間、山嶺 No.378, 376 東京野歩路会、会報 No.61, 8, 9, 10, 11 登歩溪流会、山 No.352, 353 横浜山岳会、山とスキーの会会報 No.137 朝日新聞社山とスキーの会、年報 No.2 東京農業大学山岳部、稜友 No.9-10 東京北稜山岳会 (敬称略)

慎太郎祭とウエストーン祭

毎年針の木では慎太郎祭、上高地ではウエストーン祭が催され山のお祭としてまことに意義深いありがたいものと思います。どちらも山に対する清純な愛情と憧憬とは同じもので、ウエストーンは有名な「ジャパニーズアルプス」で日本アルプスを世界に紹介し、又百瀬慎太郎さんは最近出された遺著「山を想へば」で北アの山を美しく画いておられ、又個々の心情を吐露されております。御本人としてはあのような本になって、世に出ようとは夢にも思わなかったでしょうが、あの本の出現というもので人々はどれ程山の深奥というものを知り得ることでありましょう。

私のほのかなその著書による記憶によりますと、ウエストンの初めて大町へ入ったのは明治の20年代ではなかったかと思えます。長野街道をやって来て百瀬さんのお父さんの経営なされていた対山館に足を休め、針の木へ登っているように思えます。長野の測候所で気圧計を整えて来るあたり、私共素人には気の付かぬことで既に科学的な登山をしておるのです。対山館の三階にいたら下の街道で太鼓が響く。何かと見れば救世軍の太鼓だったなど、当時大町の明治風俗など見られるような気がします。

其後彼は慎太郎さんともいき会い、又山に関して文通のあったことも「山を想へば」でよく窺えるのであります。対山館は彼にとっては忘れ難い日本アルプスの宿であり、英国に帰ったウエストーンが、日本の有名な山岳家に会った時も慎太郎さんの消息をよく尋ねたそうです。

慎太郎さんの記念レリーフは針の木、大沢小屋にあり、ウエストンのそれは上高地、梓川河畔にあり、一つは文章、一つは肖像でここで例祭が行われますが、それはそれとして、ウエストンの山姿のいいのが我が博物館にあります。これは上高地のものより山の気魄を伝えていますが、これに似通る百瀬さんの写真も当博物館に掲げたいものです。

私は思う

(本館館長・教育長 三沢 巖)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第11号 1962年12月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場